

# 万葉集

[vol.58]

日本に現存する  
最古の和歌集「万葉集」を  
わかりやすく紹介します

## ももづたふ 磐余の池に 嘴く鴨を

大津皇子

卷三 四一六番歌

# つぶやき

万葉ちゃん

和歌に  
関連するものを  
紹介するよ！

## 大津皇子の墓

万葉集によると、大津皇子の亡骸は二上山に移葬されました。二上山は葛城市・香芝市・大阪府太子町にまたがる山で、北側の雄岳(517m)と南側の雌岳(474m)の二峰から成ります。雄岳の山頂には現在も「大津皇子の墓」があるものの、二上山のどこが移葬場所かはわかつておらず、麓にある鳥谷口古墳という説もあります。

雌岳の展望台からは大和平野を望すことができ、毎年多くの登山客が訪れる絶好のハイキングコースになっています。



問 葛城市商工観光課  
☎ 0745-48-2811  
FAX 0745-48-2302

この歌の作者である大津皇子は、天武天皇と大田皇女(持統天皇の姉)の子で、皇太子である草壁皇子に次ぐ皇位継承の有力候補者でした。しかし、大津は草壁に対する謀反の罪のために死を命じられたと、『日本書紀』には記されます。大津の死に際しては、妻である山辺皇女が髪を振り乱し素足で駆け寄って殉死したという記述もあり、同書の中でも涙をさそう場面です。

この歌には、死に臨んだ大津が、磐余池の堤で涙を流して作った歌だという題詞がついています。磐余池は、大津の宮の付近にあつたとされる池です。「もも(百)づたふ」は、百につながっていく数字「五十」の「い」を導き出す言葉で、磐余池にかかります。「百に伝う」言葉を付することで、磐余池の永遠性を暗に示しているかのようだ、とも評されています。

しかし、「日本書紀」は大津を謀反人として記録しながらも、優秀な人物であつたと評価し、漢詩等の文學の才も認めています。磐余池での歌が他者の作であったとしても、大津なら死に直面しても素晴らしい歌や詩を残しただろうという認識が、当時の人々にはあつたということなのでしょう。

**訳** 百に伝う磐余の池に鳴く鴨を見るのも  
今日を限りとして、私は雲の彼方に去るのだろうか。

## 大津皇子の死

鴨は、日常的な存在でありながら、死

(本文 万葉文化館 吉原啓)